

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
大学院学生研究
2015年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	ドイツ文学	専攻		
研究代表者 (2016年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科・ドイツ文学専攻・博士課程後期課程5年		大島 直史 印				
指導教員	所属・職名		氏名				
	文学研究科ドイツ文学専攻・教授		副島 博彦 印				
自然・人文・社会の別	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同	名
研究課題	ジークフリート・クラカウアー『映画の理論』の間テクスト分析						
研究組織 (<input type="checkbox"/> 研究代表者 ・ 共同研究者) ※2016年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科・ドイツ文学専攻・博士課程後期課程5年		大島 直史				
研究期間	2015 年度						
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円						

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究はジークフリート・クラカウアー(1889-1966)の『映画の理論』(1960)における「表面的現実の救済」のコンセプトを〈アーカイヴ〉の視点から通時的に考察するものである。同書の成立史をそれと間接的に関係する諸作品も含めてテクスト横断的に検討することで、本研究は、『写真』(1927)におけるアーカイヴ概念、および、蒐集と編集をめぐる彼の実践が、1920/30年代の学芸欄散文における都市の「空間イメージ」への着眼、『映画の理論』の草稿群(1940-1949)における映画媒体と「全物質的世界」の保存との関係性の省察を経て、「表面的現実の救済」の構想へと収斂していく思想的変遷の詳述を目指す。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ジークフリート・クラカウアー] [アーカイヴ] [映画の理論]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

ジークフリート・クラカウアーが『映画の理論』(Theorie des Films, 1964)の副題に掲げた「表面的現実の救済(Errettung der äußeren Wirklichkeit)」のコンセプトは、近年に至るまで、映画の映像とありのままの現実とを同一視する「素朴なリアリズム(naive realism)」として批判されてきた。しかし、この「救済」のコンセプトの主眼に置かれていたのは、そうした現実の中立的な「再現(wiedergeben)」である以上に、むしろ映画館での映像の身体的・視聴覚的経験を通じてはじめて知覚可能になる「表面的現実」の「開示(entfüllen)」であった。また、『映画の理論』にとどまらず、現実の「開示」という点は、写真や都市空間を題材とした彼のその他の著作においても共通してみられる特徴であった。

昨年度の以上の研究成果を踏まえ、本年度の研究では、『映画の理論』を〈アーカイヴ〉の視点から通時的に考察することで、「表面的現実の救済」のコンセプトへと至る彼の思想的変遷を検討した。分析の主な対象としたのは次の5つのテキストである。

1. 学芸欄散文『写真』(Die Photographie, 1927)
2. 社会学的研究『サラリーマン—最新のドイツから』(Die Angestellten. Aus dem neuesten Deutschland, 1930)、
3. 論集『ベルリンの路上とそのほかの場所』(Straßen in Berlin und anderswo, 1964)に再録された1920/30年代の散文、
4. 『映画の理論』の草稿群(1940-49)、特に「映画の理論のための『マルセイユ草稿』」(Marseiller Entwurf zu einer Theorie des Films, 1940/41)、
5. 『映画の理論』

これらの対象を軸に、それと内容的に関連性の深いその他の散文・往復書簡なども含め、テキスト横断的に分析することで、本研究では次の三つの点が明らかとなった。第一に、〈アーカイヴ〉の視点からみた場合、後期の「表面的現実の救済」のコンセプトへと至るクラカウアーの思想的変遷は、① 1920年代、② 1920年代後半～1940年代、③ 1930～1960年代の三つの時期に大別されること、第二に、各時期の内容は、散逸、集積、編集の三つの鍵概念に集約されること、第三に、この変遷において、写真、都市空間、映画の三つの媒体が年代順に重要な位置を占めることである。

上記の思想的変遷は具体的に次のように要約することができる。

①～②：クラカウアーは、『写真』においてグラフ新聞が社会生活に大量に流通し、そこに各個人の認識を超えたあらゆる情報が蒐集されている様相を「アーカイヴ(Archiv)」のイメージで捉える。この「アーカイヴ」のイメージは、通常用いられる、各資料が分類・整理された蒐集庫を意味するのではなく、むしろ大量に集積する写真群の無秩序さをあらわす。大量の事物が区別なく無秩序に並列されるイメージは、彼の同時代の学芸欄散文において顕著な傾向であり、その例として、「更紗模様の世界—ノイバーベルスベルクのウーファ都市」(Kaliko-Welt: Die Ufa-Stadt zu Neubabelsberg, 1926)、「リンデンパサージュとの別離」(Abschied von der Lindenpassage, 1930)が挙げられる。

②～③：1930年以降、「アーカイヴ」のイメージに象徴される事物の無秩序な並列の編集の観点が前景化する。『サラリーマン』でクラカウアーが述べた定式「現実とは構成である(Die Wirklichkeit ist eine Konstruktion)」とは、社会的現実を対象とするルポルタージュの断片的形式に対し、書物の構成的形式の必要性を訴えるものである。クラカウアーはさらに「現実の構成」の問題をベルリンの都市空間にも見出していく。例えば、散文「職業紹介所について—空間の構成」(Über Arbeitsnachweise. Konstruktion eines Raumes, 1930)では、いかに失業者たちが大量に紹介所に集積し、それが空間の構成(事物の配置・ポスター・看板)を介してひとつの「模様(Muster)」へと編成されてゆくかが語られる。クラカウアーが「フランクフルト新聞(Frankfurter Zeitung)」に発表した自身のおよそ2000本の散逸的記事群を編集し、論集『路上の本』(Straßenbuch, 1933)の出版を計画したこともこの時期の特筆すべき出来事である。

③：1930年代以降、クラカウアーは各地で設立されてゆくフィルム・アーカイヴとの接触を増やしてゆく。彼はMoMAのフィルム・ライブラリーでキュレーターを務めていたアイリス・バリー(1895-1969)と接点を持ち、これを機にアメリカ亡命後に同施設の特別研究員として働くことになる。「映画の理論のための『マルセイユ草稿』」の冒頭にすでに映画作品とフィルム・アーカイヴとの密接な連関が書き留められているだけでなく、両者の関係はその後「全物質的世界(die ganze materiale Welt)」の大量保存を可能にする映画媒体の美学的特性へと発展させられてゆく。この草稿を元に執筆された『映画の理論』においてはアーカイヴの概念に代表される物量の問題は直接的には論じられない。しかしそこでの「表面的現実の救済」のコンセプトが草稿時の「全物質的世界」の概念を下敷きにしていることは明らかであり、今後はこの概念がどのように「救済」のコンセプトへと変装されてゆくのかを検討する。

研究成果の概要 つづき

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

1. 雑誌論文 (査読審査中)

Naobumi, Oshima: Name und Photographie. Mediale, autofiktionale Verwandlung des Selbstbilds in Siegfried Kracauers *Ginster* und *Die Photographie*

[Dokumentationsband des 56. und 57. Tateshina-Seminars, München: Iudicium]